

# 過去の習慣が現在の習慣に与える影響

## —インターネットの利用習慣の持ち越し—

松岡大暉

(東北大学教育学部)

### 1 問題関心

本研究の目的は、インターネットの利用の習慣について、過去のインターネットの利用習慣が現在のインターネットの利用の習慣に影響を与えるかを検証することである。

まず、本研究の中心となる社会的背景として、近年のインターネットの利用人口ならびに、インターネットの利用時間の急激な増加が挙げられる。総務省の「平成 27 年度 情報通信白書」によると、インターネット利用者の割合が平成 16 年度には、66.0%であったが、平成 26 年度には 82.8%に増加し、インターネットの利用時間を見ても、1 日の平均利用時間が平成 24 年から 26 年にかけて 71.6 分から 83.6 分へと増加傾向にある。これに関連して、墨岡(2001)や田口(2008)などのインターネット利用時間と健康の関係についての研究において、インターネットの長時間利用が抑うつや孤独感などの精神障害および睡眠障害の増加に影響を与えていることが示唆されている。

このような、現代の日本の状況より、インターネットの長時間利用の予防や制限を考えるために本稿では、インターネットの利用習慣の持ち越しについて、過去のインターネットの利用習慣と現在のインターネットの利用習慣の関係性を社会人に対するアンケート調査を用いて明らかにしていく。

### 2 先行研究と本研究の意義

習慣の持ち越しに関する研究は運動習慣については Suzuki and Nishijima(2006)や鈴木(2008;2009), Mechelen and Kemper(1995)の研究がある。Mechelen and Kemper(1995)においては、13 歳から 16 歳の 4 年間の運動習慣の持ち越しには相関係数で 0.4 から 0.6 程度の中程度の影響があるということを示している。また、鈴木(2009)においては、地域の運動・文化活動を実施するコミュニティークラブに所属している 49~79 歳の男女 80 人を対象とし調査を行い、過去の運動習慣と現在の運動習慣には中程度の関連があるということを示している。また同研究において、過去の運動習慣から現在の運動習慣へは「運動がすきか、そうでないか」という運動好意度が間接的に影響しているとも示されている。

しかし、これまで述べてきたような運動習慣の持ち越しに関する研究はあるが、インターネットの利用習慣の持ち越しに関する研究はまだ行われていない。これはインターネットの利用習慣の研究が全く将来性のない全く意味のない研究対象であるということではなく、これから研究されていく新しい分野であると考えられる。先にも述べたように、インターネットが急激に普及し、利用が増加し、健康にも悪影響が出ている現代社会においてインターネットの利用の制限等を考える必要性があるからである。また本研究において、過

去のインターネットの利用習慣から現在のインターネット利用習慣の変化についても考慮に入れている。今後、インターネットの普及率が90%を超え、100%近くまで上昇することが考えられ、このような変化を考慮に入れた研究が容易ではなくなることから本研究には十分な意義があると考えられる。また、上で挙げた先行研究は学生(高校生または大学生)もしくは中・高年齢を調査対象としていたが、本研究においては20歳から40歳までの若年層を対象にしている点にも先行研究との相違がある。

### 3 仮説

以上を踏まえ、本研究においては、以下の2つの仮説を設定する。1つ目は、「過去のインターネットの利用習慣が現在のインターネットの利用習慣に影響を与える」である。2つ目は、「仮説①において、インターネットへの好意度を介して影響を与える」という2つの仮説を設定する。仮説②は、その影響の原因となっていることを考察するためのものである。

### 4 使用データと分析方法

#### 4.1 データ

本研究で用いるデータは、2017(平成29)年7月から8月にかけて東北大学教育学部本実習が実施したアンケート調査「若年層のライフスタイルと意識に関する調査<1>」によるものである。調査対象者は、日本在住の20歳以上40歳未満の非学生の男女である。実査は、調査票の郵送法により行われ、返信用封筒により回収した。計画サンプルサイズは300人であったが、回収数は243であった。回収率は81%である。この中には、各質問項目における欠損を含むデータが6つ含まれていたが、回収数に対する割合がとても低いこと、データ内においてより正確な分析を行うために除外し、除外後の237つのデータで分析を行った。記述統計は表1で示すとおりである。

表1 記述統計量

			%	度数	平均	標準偏差
過去の インターネット 利用頻度 (N=237)		1. してなかった	17.7	42	2.9	1.1
		2. 週1-2日	20.3	48		
		3. 週3-5日	19.0	45		
		4. 週6-7日	43.0	102		
現在の インターネット 利用習慣 (N=237)		1. してない	5.1	12	3.6	0.8
		2. 週1-2日	6.8	16		
		3. 週3-5日	10.1	24		
		4. 週6-7日	78.1	185		
過去の インターネット 利用時間 (N=237)	平日	1. 0-30分	30.8	73	2.7	1.5
		2. 30分-1時間	17.3	41		
		3. 1時間-2時間	24.1	57		
		4. 2時間-3時間	13.9	33		
		5. 3時間-4時間	6.3	15		
		6. 4時間以上	7.6	18		
	休日	1. 0-30分	30.8	73	3.0	1.7
		2. 30分-1時間	11.0	26		
		3. 1時間-2時間	19.8	47		
		4. 2時間-3時間	16.0	38		
		5. 3時間-4時間	9.7	23		
		6. 4時間以上	12.7	30		
現在の インターネット 利用時間 (N=237)	平日	1. 0-30分	10.1	24	3.3	1.4
		2. 30分-1時間	18.1	43		
		3. 1時間-2時間	28.7	68		
		4. 2時間-3時間	22.4	53		
		5. 3時間-4時間	10.1	24		
		6. 4時間以上	10.5	25		
	休日	1. 0-30分	9.3	22	3.7	1.5
		2. 30分-1時間	12.2	29		
		3. 1時間-2時間	22.8	54		
		4. 2時間-3時間	24.1	57		
		5. 3時間-4時間	13.5	32		
		6. 4時間以上	18.1	43		
過去の インターネット 利用好意度 (N=237)		1. 非常に嫌いであった	1.3	3	2.8	0.8
		2. 嫌いであった	1.7	4		
		3. どちらでもない	31.6	75		
		4. 好きであった	43.5	103		
		5. 非常に好きであった	21.9	52		
現在の インターネット 利用好意度 (N=237)		1. 非常に嫌いである	0.8	2	4.1	0.7
		2. 嫌いである	1.3	3		
		3. どちらでもない	15.7	37		
		4. 好きである	57.2	135		
		5. 非常に好きである	25.0	59		

#### 4.2 分析方法

はじめに、本研究の調査項目について説明する。調査項目は、過去(最終学歴段階)のインターネットの利用頻度(4件法:「最後に通った学校段階において、どれくらいの頻度でインターネットを利用していましたか。」「してなかった=1」、「週1-2日=2」、「週3-5日=3」、「週6-7日=4」)、過去(最終学歴段階)のインターネット利用時間(6件法:「最後に通った学校段階において、平日、休日1日にそれぞれ平均してどれくらいの時間インターネットを利用していましたか。」「0-30分=1」、「30分-1時間=2」、「1時間-2時間=3」、「2時間-3時間=4」、「3時間-4時間=5」、「4時間以上=6」)、過去(最終学歴段階)

のインターネット利用への好意度(5件法:「最後に通った学校段階において、インターネットの利用は好きでしたか。」「非常に嫌いであった=1」,「嫌いであった=2」,「どちらでもない=3」,「好きであった=4」,「非常に好きであった=5」),現在のインターネットの利用頻度(4件法:「現在、どれくらいの頻度でインターネットを利用していますか。」「してない=1」,「週1-2日=2」,「週3-5日=3」,「週6-7日=4」),現在のインターネット利用時間(6件法:「現在、平日、休日1日にそれぞれ平均してどれくらいの時間インターネットを利用していますか。」「0-30分=1」,「30分-1時間=2」,「1時間-2時間=3」,「2時間-3時間=4」,「3時間-4時間=5」,「4時間以上=6」),現在のインターネット利用への好意度(5件法:「現在、インターネットの利用は好きですか。」「非常に嫌いである=1」,「嫌いである=2」,「どちらでもない=3」,「好きである=4」,「非常に好きである=5」)であった。

これらをもとに、共分散構造分析を用いて、観測変数「過去のインターネットの利用頻度」,「過去のインターネットの利用時間」,「過去のインターネットへの好意度」から新たな潜在変数である「過去のインターネット利用習慣」と観測変数「現在のインターネットの利用頻度」と「現在のインターネットの利用時間」から新たな潜在変数である「現在のインターネットの利用習慣」の2つの変数を作成した。「過去のインターネット利用習慣」は調査で観測された過去(最終学歴段階)のインターネットの利用頻度,過去(最終学歴段階)のインターネットの利用時間及び過去(最終学歴段階)のインターネット利用への好意度で説明される。「現在のインターネット利用習慣」は、現在のインターネットの利用頻度と現在のインターネットの利用時間で説明される。

次に分析方法を説明する。仮説①については、過去のインターネットの利用習慣と現在のインターネットの利用習慣の因果関係を検討するために、構造方程式モデリングにおける多重指標モデルを用いた。多重指標モデルでは、過去のインターネットの利用習慣(潜在変数)から現在のインターネットの利用習慣(潜在変数)への因果関係を検討した。また、仮説②については、現在のインターネットへの好意度が仮説①に与える影響について検討するために、過去のインターネットの利用習慣(潜在変数)と現在のインターネットの利用習慣(潜在変数)の因果関係に現在のインターネット好意度を介在変数に導入したモデルを検討した。本稿では、仮説①及び仮説②について、平日と休日を区別して検討した。

モデル全体の適合度指標にはGFI(Goodness of Fit Index)の値を用いた。本研究で扱うすべての統計解析は、SPSS及びAmosを用いた。

## 5 分析結果

まず、仮説①「過去のインターネットの利用習慣が現在のインターネットの利用習慣に影響を与える」を検証する。

平日の過去のインターネットの利用習慣(過去のインターネット利用頻度,過去のインターネットの利用時間,インターネット利用への好意度)と平日の現在のインターネットの利用習慣(現在のインターネットの利用頻度,現在のインターネットの利用時間)の因果関係について、構造方程式モデリングによる多重指標モデルを用いて検討した結果、過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネット利用習慣に対するパス係数が

0.47( $p<0.05$ )を示した(図 1)(適合度 : GFI=0.958). また, 休日についても同様に検討した結果パス係数が 0.59( $p<0.05$ )を示した(図 2)(適合度 : GFI=0.960).

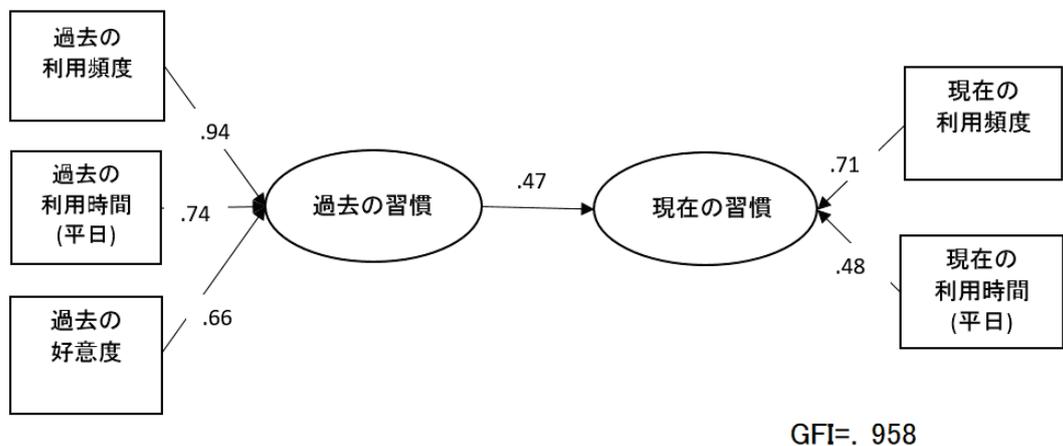


図 1 過去のインターネットの利用習慣と現在のインターネットの利用習慣の因果関係(平日)

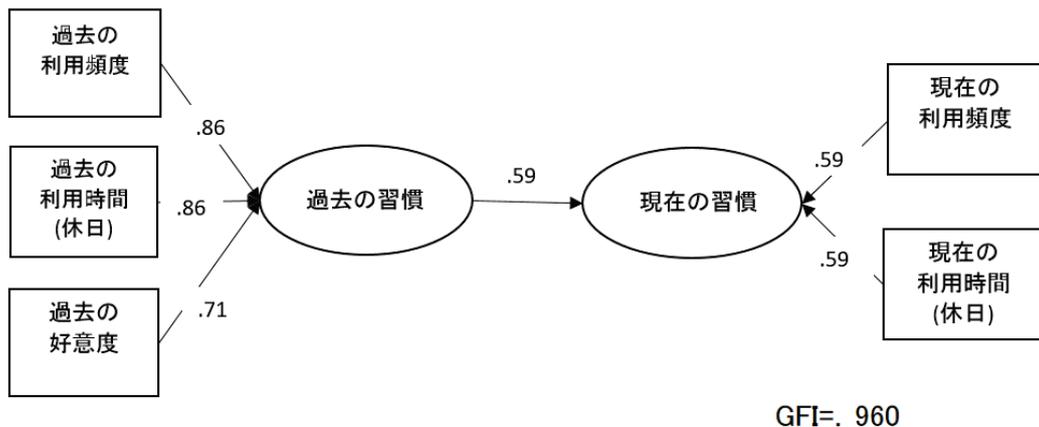


図 2 過去のインターネットの利用習慣と現在のインターネットの利用習慣の因果関係(休日)

次に, 仮説②「仮説①において, インターネットへの好意度を介して影響を与える」を検証する. 仮説②の検証のために, 仮説①, 図 1(平日)のモデルに現在のインターネットへの好意度を介在変数として導入したモデルを設定した. 分析の結果, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットの利用習慣に対するパス係数が 0.38( $p<0.05$ ), 過去のインターネットへの好意度から現在のインターネットへの好意度に対するパス係数が 0.68( $p<0.05$ ), 現在のインターネットへの好意度から現在のインターネットの利用習慣に対するパス係数が 0.32( $p<0.05$ )を示した(図 3)(適合度 : GFI=0.963).

一方で, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットへの好意度に対するパス係数は-0.20( $p<0.05$ )を示した.

休日についても同様に検討した結果, 過去のインターネットの利用習慣から現在のイン

ターネットの利用習慣に対するパス係数が 0.44( $p<0.05$ ), 過去のインターネットへの好意度から現在のインターネットへの好意度に対するパス係数が 0.69( $p<0.05$ ), 現在のインターネットへの好意度から現在のインターネットの利用習慣に対するパス係数が 0.37( $p<0.05$ )を示した(図 4)(適合度 : GFI=0.956).

一方で, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットへの好意度に対するパス係数は-0.20( $p<0.05$ )を示した.

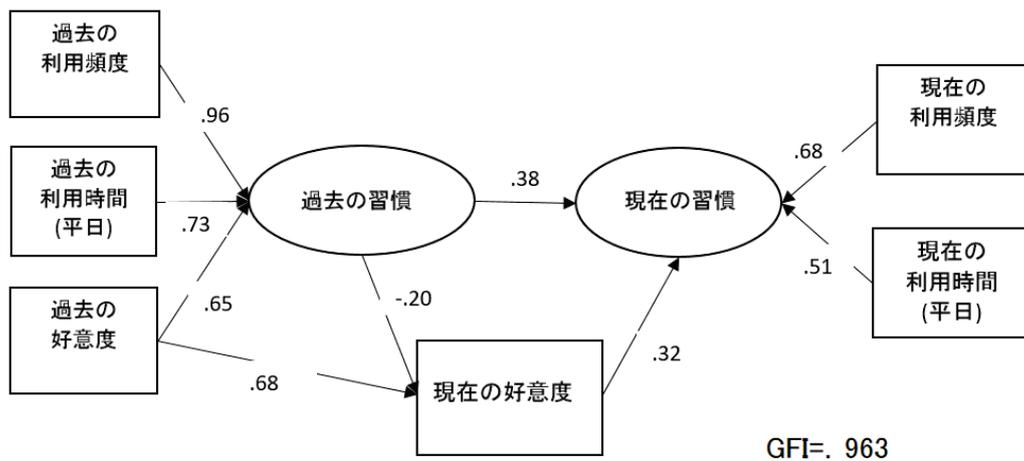


図3 インターネットへの好意度を介した因果関係(平日)

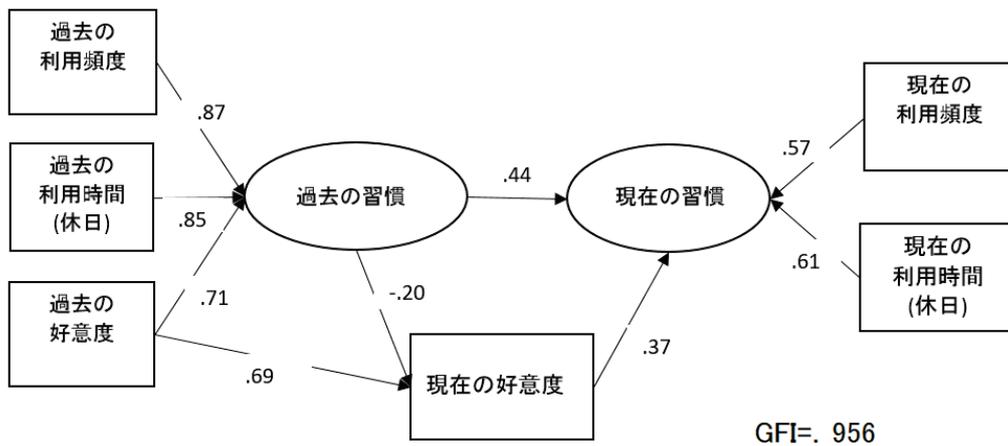


図4 インターネットへの好意度を介した因果関係(休日)

## 6 考察

まず, 平日のインターネットの利用習慣の因果関係について考察をする. 図1で示すよ

うに過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットの利用習慣に対するパス係数が 0.47, また, 図 3 では, 同じく過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットの利用習慣に対するパス係数が 0.38 であり, 過去のインターネットの利用習慣が現在のインターネットの利用習慣に中程度の影響を与えていると示唆されているとすることができる. また, 図 3 の現在のインターネットへの好意度に注目してみると, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットへの好意度に対するパス係数は-0.20 を示しており, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットへの好意度への影響はあまりないことが示唆される. 他のパスでは, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットへの好意度, 現在のインターネットへの好意度から現在のインターネットの利用習慣, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットの利用習慣のパス係数は十分に影響を与えているといえる値をとっている. しかしながら, 図 1 と図 3 に注目すると, 過去の習慣と現在のインターネットへの好意度から現在のインターネットの利用習慣に対する各パス係数の値は同程度であるということができ, 特に現在のインターネットへの好意度が過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットの利用習慣の因果関係に間接的な影響を与えているとは言えない.

次に, 休日のインターネットの利用習慣の因果関係について考察をする. 図 2 で示すように過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットの利用習慣に対するパス係数が 0.59, また, 図 4 では, 同じく過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットの利用習慣に対するパス係数が 0.44 であり, 過去のインターネットの利用習慣が現在のインターネットの利用習慣に中程度の影響を与えていると示唆されているとすることができる. また, 図 4 の現在のインターネットへの好意度に注目してみると, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットへの好意度に対するパス係数は-0.20 を示しており, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットへの好意度への影響はあまりないことが示唆される. 他のパスでは, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットへの好意度, 現在のインターネットへの好意度から現在のインターネットの利用習慣, 過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットの利用習慣のパス係数は十分に影響を与えているといえる値をとっている. しかしながら, 図 3 と図 4 に注目すると, 過去の習慣と現在のインターネットへの好意度から現在のインターネットの利用習慣に対する各パス係数の値は同程度であるということができ, 特に現在のインターネットへの好意度が過去のインターネットの利用習慣から現在のインターネットの利用習慣の因果関係に間接的な影響を与えているとは言えない.

平日と休日と比較してみると, 各パスの値とも大きな変化は見られず, 特に平日と休日によるインターネットの利用の相違があるとは言えない.

最後にもう一度, 現在のインターネットへの好意度を介した因果関係について考察したい. 運動に関する調査では, 鈴木(2009)において, 現在の運動への好意度が間接的に運動習慣の因果関係に大きな影響を与えているということであったが, 図 3, 図 4 が示すとおり, インターネットの利用習慣においては, 現在のインターネットへの好意度が特に大きな影響を与えているとは言えなかった. このことについては, 20 歳代, 30 歳代のインターネット利用に関する調査を行った関根(2013)が示しているように 20 歳代, 30 歳代のインターネットの利用はスマートフォンによる「ながら利用(テレビを見ながらなど)」が多いことが影

響していると推察できる。インターネットの利用は運動とは異なり、他の事をしながら利用できる、「好きだからやる」といった、好意度が直接的に利用に影響を与えている関係には運動ほどなっていないのであろう。

最後に過去のインターネットの利用習慣と現在のインターネットの利用習慣の因果関係を説明する場合には、縦断的なデータを用いて、長期間にわたって追跡調査することが望ましい。本研究では遡及的調査による横断的データを用いて因果関係を説明しているために過去のインターネットの利用習慣に関する記憶に基づく分析・解釈を行っているという問題があり、結果の解釈には注意する必要がある。また、性別、年齢、学歴、職種等の個人の属性における統制は本稿ではおこなっておらず、これらについても今後の課題である。

#### 参考文献

- 鈴木宏哉, 2009, 「どんな運動経験が生涯を通じた運動習慣獲得に必要なか? : 成人期以前の運動経験が成人後の運動習慣に影響を及ぼす影響」『発育発達研究』(41) : 1-9
- , 2008, 「大学生における運動習慣の獲得に必要な過去の運動経験」『人間情報学』(13) : 47-58
- Suzuki, K and Nishijima, T., 2006 Criteria of exercise and sports for improvement of physical fitness and motor ability in youth (15-18 year olds) *Human Performance Measurement*, 3, 11-19
- Mechelen, W. and Kemper, H., 1995 Habitual physical activity in longitudinal perspective. *The Amsterdam Growth Study*, 135-158
- 墨岡孝, 2001, 「インターネット依存症の実態」『Pusiko2』(4) : 62-67
- 田口雅徳, 2008, 「大学生におけるインターネット利用状況と健康行動との関連」『情報科学研究』: 89-93
- 高瀬加容子・柘植順子・石田妙美, 2015, 「インターネットを利用したコミュニケーションと精神健康度の関連性」『東海学園大学紀要』(21) : 63-76
- 関根智江, 2013, 「20代, 30代はどのようにインターネットを長時間利用しているのか~メディア利用の生活時間調査から~」『放送研究と調査』(2013年4月号) : 32-43
- 総務省, 2015, 『平成27年度版 情報通信白書』
- 今野勝幸, 2012, 「構造方程式モデリングモデル構築の再検討」『外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部 メソドロロジー研究部会 2012 年度報告論集』: 68-74